

第151回くらしの植物苑観察会 2011年10月22日(土)

## 佐倉城址の秋の植物

原 正利(千葉県立中央博物館 環境・生態研究部)

暑さもようやくやわらぎ、さわやかな天気のもと、散策に絶好の季節となりました。まだ紅葉の季節とはいきませんが、野外では、夏の暑さを乗り切った植物たちが、さまざまな実をつけ、花を咲かせています。くらしの植物苑と佐倉城址の一角を歩きながら、これらの植物について、やさしく解説します。

佐倉城址の森の特徴は、スダジイやシラカシ、タブノキなどの常緑広葉樹とケヤキ、ムクノキなどの落葉広葉樹の両者が見られること、そして大木が多いことです。これらの樹木は、植栽されたものもありますが、自然に生育している植物が意外に多く、また、大木が多いことから、森として十分な時間を経ていることがわかります。このため、佐倉城址の森の植物の観察を通して、人間が開発する以前の、この地本来の森の姿を伺い知ることができるのです。

野外に自生する植物は、でたらめに生育している訳では無く、その場の環境条件に適した植物同士が集団を形成し、生育しています。このような植物集団を植生と呼び、そのことを研究する学問を植生学といいます。

植生学的に見ると、千葉県は気候が温暖なことから、照葉樹と呼ばれる、比較的、小型の葉を持つ常緑広葉樹の森が本来、発達する地域、すなわち照葉樹林帯に属します。照葉樹林帯は、東アジアの暖温帯・亜熱帯の地域に広くおおっています。しかし、千葉県は、その北限付近に位置するため、落葉広葉樹が多く混じるのが特徴です。

佐倉城址の森に多い照葉樹の代表は、スダジイやシラカシ、ウラジロガシなどのカシ類です。植物分類学的に、これらは全てブナ科に含まれ、果実として、いわゆるドングリを付けるのが特徴です。このうち、ウラジロガシは千葉県南部の丘陵地には普通に見られますが、北部の台地では、やや珍しい種類といえます。照葉樹のもう一方の代表であるクスノキ科の植物は、タブノキ、シロダモなどが見られますが、やや少ないようです。これは、やや内陸に位置するため、冬の寒さや乾燥がやや厳しいためと考えられます。

一方、佐倉城址の森に多い落葉広葉樹の代表は、ケヤキやムクノキ、エノキなどニレ科の植物です。これらの樹木は大木になりますが、種子が風や鳥によって広範囲に散布されるのが特徴です。このため、樹木が疎らで明るい場所を速やかにキャッチして、その場で成長することが出来るのです。佐倉城址で、これらの樹木が多いのは、樹木の伐採など人為的かく乱が、少し前までは高頻度で発生していたことを示しているように思われます。他の落葉広葉樹として、オニグルミも見られます。オニグルミは、本来、水辺に生育する植物ですが、佐倉城址では、斜面の上部にも生育しています。これは種子を食べるために植栽されたのかもしれません。

.....

**次回予告** 第152回くらしの植物苑観察会 2011年11月26日(土)

「明治の菊の仕立て」 平野 恵(さいたま市大宮盆栽美術館)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要